



1 さばえなす

故、皇祖高皇產靈尊、特に憐愛を鍾め、以ちて崇て養しき。
遂に皇孫天津彦彦火瓊瓊尊を立て、葦原中國の主と爲さんと欲す。
然れども彼の地に螢火の光く神、及び蠅聲す邪神多に有り。



蚕起きて桑を食む皐月の末。

梅雨の気配がほのかに近付く空は、雲の合間の五月晴れ。緑樹をわたる薫風が涼を生ずる博麗神社であるが、その境内を見回しても、いつものように掃除の合間にお茶を啜るぐうたら巫女の姿は見当たらない。

束の間の主の不在を守るように、鳥居の前に並んで不埒者に目を光らせる狛犬の脇。無人の境内を横切るように小さな羽音が響いていた。

力強い羽音を響かせ飛ぶのは、黒い羽根を広げた鋏形虫クワガタムシのつがいである。

二匹の甲虫は連れ立つように拝殿の脇を回り込み、社家の縁側へと降り立った。黒光りする虫の背中からびよんと飛び降り、小人の末裔・少名針妙丸はふうと息を吐く。

「ただいまー、っと」

縁側から居間の奥へと声をかけ、小人の姫はわずかに首を傾げた。手を眉の上に当て、背伸びをして返事のない廊下の向こうに目を凝らす。

「霊夢、留守かしら？ 不用心ねえ、こんなに開けっぱなしで」

針妙丸の背中には大きな荷物があり、随伴してきたもう一匹の背中にも同じく大きな風呂

敷包みが括りつけられていた。鍬形虫達を労いながら、針妙丸はよいしょよいしょと荷物を外してやる。

ようやく体が軽くなつたと、甲虫たちは羽根を震わせて顎を鳴らした。

「あなた達もご苦労様。とっても助かったわ。……ちよつと待っててね!」

自分の身体の倍ほどもある荷物をまとめて抱えあげ、針妙丸は居間の卓袱台の上へぴよんと跳び上がった。現在の住居である虫籠ハウスに風呂敷包みを押し込んで、水屋の納戸へ。昨晚のデザートであつた小玉西瓜の皮を引っ張り出して、縁側へと取って返す。

「はい、どうぞ!」

お礼と差し出した西瓜の皮に、鍬形虫達が飛び付くのを見てうんうんと頷き、腰を叩いて背伸びをひとつ。額の汗を拭って空を見上げる小人の姫。

幻想郷を騒がせた下克上異変。小人族に伝わる秘宝・打ち出の小槌がもたらした大騒動からしはしの時が過ぎていた。

針妙丸は現在も、この異変の首謀者として博麗神社で保護観察中の身である。黒幕のアマノジャクが指名手配を受けていまだ逃亡を続けるなか、針妙丸の再度の事件への関与を防ぎ、また彼女自身を復讐から守るための措置だ。しかし、昨年の異変から半年余りの時が過ぎ、いまやその扱いは割合適当なものであった。保護者のはずの霊夢からしてあまり真面目に針妙丸を監視する様子がなく、こうして勝手に出歩くことも咎められない。

したがって、針妙丸は毎日のように神社を抜け出しては広大な幻想郷を探検し、新しい出会いや珍しい驚きに満ちた冒険の日々を送っているのである。遡れば単身京に上った一寸法師の血筋ゆえか、鬼の世界で育った純粹培養の箱入りプリンセスも、いまや腕白なおてんば姫であった。

異変時には小槌の力で人間サイズ（それでも子供と大差ない身長であったが）に大きくなっていた針妙丸だが、現在も小槌は魔力回収期の真っ最中であり、小人の姫は元のサイズの10センチ。この身体では思うように空を飛ぶこともままならず、地面を歩くにも難儀する。そのため、彼女の足代わりとして活躍しているのが、歳を経て力を付けた蜻蛉トンボや甲虫カブトムシといった虫たちなのであった。

「今日はとても助かったわ。またお願いできるかしら？ ……え？ 西瓜じゃ足りない？ もっと甘いのが欲しいって？ ……うーん、お台所に蜂蜜とかあったかしら。霊夢ったら、あんまりそういうの食べないのよねえ」

頬に手を当て、鍬形虫たちの西瓜の皮のおかわりに応じる針妙丸。こうして小動物や虫と会話する能力もまた、彼ら小人族の父祖である鬼退治の英雄より受け継いだものである。おとぎ話に語られるように、勇者一寸法師は小鳥や栗鼠のひそひそ話によって悪事の企みを知り、窮地を脱するのだ。

「ありがとねー」

律儀にぺこりと頭を下げ、飛び立ってゆく鍬形虫たち。手を振ってその背中を見送る針妙丸に、不意に近くから声がかかる。

「あんまりこき使わないであげてよね」

「あら、居たの？」

「さっきからずっと待ってたんだけど」

近くの草むらから姿を見せたのは、緑髪にマント姿の蛍妖怪リグル・ナイトバグ。触角をピンと跳ねさせ、しきりに周囲を警戒しながら、どこか緊張の面持ちである。

「霊夢なら留守みたいよ？」

「巫女に用事なんかないってば。さっきの子達の様子を見に来たの。ご飯を邪魔するのもしうかなって思っただけよ」

言いながらも、巫女の不在にリグルは大きく安堵した様子だった。

この、闇に蠢く蛍妖怪は幻想郷に数多ひめく虫のリーダーであり、目下蟲の不当な搾取を防ぎ、地位向上に尽力する活動が続けている。針妙丸がたびたび虫を足代わりに使っている事を知って、わざわざ博麗神社まで顔を出すようになっていたのである。

「ちゃんとお礼してるわよ。あなたも欲しかったの？ 西瓜」

「……そういうことが言いたいんじゃないんだけどなあ」

頭を掻いてぼやくリグルに、針妙丸はあらと顔を上げ、

「だって、あなたも下剋上の時は小槌のせいで暴れちゃったんでしょ。あとで霊夢にお仕置きされたりして大変だったんじゃない？」

「あのねえ」

完全に侮られている事に気付いたリグルは、ばさりとマントを揺らして胸を張ってみせた。

「私ね、これでも虫達の王様なの。どっちかっていったら下剋上はされる側だったのよ」

「えええ!! 本当?!」

案の定、針妙丸は思いつきり驚いた様子で仰け反ってみせた。片付けの手を止めてしげしげとリグルを見つめながら「そんなふうには見えないけどなあ」と声を潜めるでもなく、実に素直な感想を口にする。

自分でも威厳のある方だとは思ってはいないが、そこまであからさまにされると、流石に一寸の虫にも五分ばかりのプライドがちよっと傷付くリグルであった。

「それはそれでごめんなさい、なのかしら」

「まあ、別に困らなかつたらどうってことないけど」

これは本当のことだ。小槌の影響は必ずしも一樣ではなかつたらしく、下克上異変の期間を通じて、虫達は特に普段と変わりなく過ごしており、リグルのリーダーシップは揺らがなかつたのである。

揺らぐだけのものがなかつたからではないか——という余計な想像は、頭を振って追い払

っておく。そんなリグルをよそに、針妙丸は虫籠の家へと戻り、買ってきたばかりの荷物をいそいそと広げ始めていた。

ハンカチほど風呂敷の中から、次々に出てくるのは色とりどりの生地と糸。

裁縫は小人の姫の嗜みであり、その腕前は人間の職人にだって引けを取らない。最初は手持無沙汰の退屈を紛らわすために始めた自分の着物の縫い直しだったのだが、着の身着のままだった小袖を直し、1ダースほどドレスを新調し、虫籠の家を飾り付けて居住環境まで整えてしまうとすっかりやることなくった。

そこで、住居を提供してくれている恩返しと、針妙丸は神社の繕い物をあれこれと引き受けるようになったのである。

「ふんふふーん」

ご機嫌で仕入れたばかりの生地——小人が運べる適正サイズということで、実寸ではほとんど端切れのようなものだが——ずらりと並べ。ふんすと鼻息荒くたすき掛けをして針と糸の戦闘態勢をとる針妙丸を、リグルは半ば呆れ気味に見つめていた。

「毎日毎日、巫女のためなんかによくやるなあ……飽きたりしないの？」

「霊夢にはいろいろ世話になってるし、異変で迷惑をかけちゃったのは本当だからね。小穂の事も良く分からないであいつに騙されてさ。それに、好きでやってる事だし」

言いながらも小人の姫は針を動かす手を止めない。けれど、あいつ、という言葉を口に乗

せる瞬間だけ、針妙丸の視線が遠くを彷徨ったのにリグルは気付いていた。

かがった糸の端をぶつんと糸切り歯で切りながら、針妙丸は顔をあげ、

「それに、今日はお店になんだかたくさん新しい生地があったから、安く譲ってもらっちゃったのよ。里のほうで新しい織物ができるようになったみたい。そのせいで前からあった絹間屋がやめちゃったらしいんだけどさ」

「へえ」

初耳であった。リグルはわりと人里からは距離を置きがちであるため、里の流行には疎いほうだ。服にもあまりこだわらない。

このあたりは妖怪の基準として概ね皆そんなものだ。ルーミアなどに至っては何週間もそのままの事もあるほどだ。一方で個人差も大きく、知り合いの夜雀などは自他共に認めるお洒落さんで、よく新しい服を作ったり、里の古着屋を巡ったりもしており、リグルも何度か誘われたことがあった。八つ目鰻の屋台を始め、命蓮寺の山彦達と妖怪バンドを組んでからはさらにパンキッシュな服も増えて、ますます衣装持ちである。

……実は、リグルのねぐらにもとても少女趣味なドレスが一着、箆笥の奥にこっそりしまっていたりするのだが——前に一度袖を通しただけで、人前で着たことはない。

閑話休題。

「そう言えばさ。人里って言えば、なんか面白い感じになってたんだけどね。なんでも新し

い神様がやってきたらしいのよ」

「……神様？」

裁縫を続けながら——結局、話し相手がいなくて退屈していたのだろう——針妙丸の話すところによれば。

現在、人里には新しい神様を祀る新興宗教が席巻し、人間達は珍妙な服装を身に纏い、こぞってその神を崇めているらしい。霊験あらたかな神の力に入信者は後を絶たず、大きな問題となっているということだった。

これまたリグルには初耳だった。先日の宗教戦争の話かと聞いてみるが、針妙丸は首を横に振り、

「常世の国……別の世界の神様だって言ってたわ。お祈りすると不老不死になったり、たくさん財宝が見つかるんだって話みたいだけど」

「別の世界、ねえ……」

リグルはいかがわしい単語に眉を潜めて舌を出す。自己を精神に強く依存する妖怪にとって、他者に心を預けることになる宗教というのは基本的に相容れないものだ。

針妙丸の語るところによれば、件の神様がもたらす御利益は露骨な現世利益。まったくもって胡散臭い話であった。もっとも、宗教なんて大体そんなものではないかと言ってしまえばそれまでではあるけれど。

針妙丸も同感だとばかり、眉に唾を付ける仕草を試みせる。不遇にかこつけて異変の首謀者に担がれた経験ゆえだろうか。

「それでね。その神様っていうのが、どうも虫のことらしいのよ」

「……なにそれ」

思わぬ単語にリグルは触角をピンと真上に跳ねさせる。

「だから、虫。……知らないの？　ねえ。あなた、本当に虫の王様？」

こくと首を傾げ、針妙丸は不審な顔をしてみせた。

「本当よ！　……本当の、はず、なんだけど」

「なんでそんなに自信なさげなのよ」

「それはまあ……色々あってさ」

蛭妖怪として。虫達のリーダーである事については、リグルも色々と思うところがある。ともあれ。こればかりは初耳で済ませていいことではなかった。虫がそんな風に扱われているなんてことを、虫のリーダーが知らないというのは一大事である。

慌ててリグルは触角を跳ね上げ、羽根を震わせて緊急の『号令』を発し、近くにいる配下の虫を呼び集めた。境内にぞろぞろとやってきた彼らの中から、行動範囲の広い銀蠅ギンバエを始め、髪切虫カキキリムシや飛蝗ハイツダ、家蚊アカイエカなど人の社会に近い者に問い質すと、確かに針妙丸の言う通り、里で虫が祀られ、信仰を集めているのは事実であるらしかった。

この神様の来訪に里人たちが浮かれ騒ぎ、仕事も放り出して遊び呆けている有様だという。既に信徒たちの間では教団のようなものでできあがり、人々は口々にその虫をあがめ、供物を捧げて信仰を注いでいるそうだった。

虫達から届く話はどれも胡乱なものばかり。聞いているうちに、リグルの触角は妙な角度へとねじれていくばかりであった。

「ね？ 本当でしょ？」

「うん……」

頷くリグル。しかし、おかしい。虫達にそんな異変があるのなら、リグルの耳に入っていないはずがない。蟲のリーダーとしての虫妖怪は、言葉をもたない虫たちにとっての涉外役である。外部との交渉や折衝を行うための共生関係をもつ以上、虫の王にはそれらの異常は自ずと伝わってくるようになっていくはずなのだ。

「ねえ、あなた」

「ん？」

妙な胸騒ぎに、リグルはたまらず居間の上に身を乗り出していた。針妙丸の座る卓袱台の真横に顔を押し付け、いつになく切羽詰まった様子で詰め寄る。

「いますぐ、私をそこに連れてって！ はやく！」

「……う、うん」

いつになく真剣な蛭妖怪の剣幕に押され、小人の姫はただ、頷くばかりであった。



火の始末に水元の確認。留守になる神社の戸締りを済ませ四半刻ほどを過ぎた後に、二人の姿は人里の上空にあった。

「あそこよ」

先導の秋茜^{アキアカネ}を傍らに、黒いマントをたなびかせるリグル。そのシャツの胸ポケットに収まり、10センチばかりの少女が顔を覗かせる。小人姫の小さな指先が示す先、里の一隅には見慣れぬ白い旗が掲げられていた。

“神とも神と聞こえる
かくも畏^{かしこ}き常世^{とこよ}の神^{かみ}”

大書された聖句の文字が風にはためき揺れる。里の一隅にはまるで森や林のように白旗が密集し、風に揺れながらその威光遍く領土をしろしめしている。

辻のそこそこには、真新しい小さな分社が立ち並び、道行く人々はその傍らに立ち止まっ

ては、熱心に頭を下げていた。

「^{トヨカミ}常世神……？」

旗竿には、その神の名と共に、信仰の象徴と思しき橘の枝が結わえられている。あまり神様だの信仰だのといったものには詳しくないリグルであるが（秋の神様や厄神など親しい相手がいないわけではないが）、見覚えのない祭祀であるように思えた。

「さっきは遠目に見てただけだったけど……こう見るとすごいわね」

胸ポケットの針妙丸もまじまじとそれを眺め、腕組みをして難しい顔だ。

白旗の群れる大通りを見れば、赤ら顔の人間達が見てもするように宴席を広げ、酒を酌み交わし、やれめでたや嬉しやと口々に喜び騒いでいる。お祭りごとに目のない幻想郷の住人たちではあるが、緑も盛りのこの季節に仕事を放り出し、昼日中から酒盛りに興じ、遊び呆けているというのは少しばかり異様であった。

思い出されるのは、いつだったかの3日おきの宴会騒ぎか。

「……………」

里のそこらじゅうに満ちる違和感を、広げた触角の端から端までにひしひしと感じ、額に皺をよせながら、リグルは少し離れた路地へと着陸した。

「ちよっと様子見てくる。少し隠れてて」

「え？　ちよ、むぎゅっ」

ポケットの中へと短く告げ、小人を奥へと押し込んでボタンを掛ける。玉虫タマムシの光る羽根を鏡がわりにして、リグルは空の上で乱れた服装を整えた。

知り合いには人に化けるのが得意な妖怪も多いが、リグルはその類の能力には不得手である。ひとまず触角を目立たないよう、緑の細いものに変えておく。髪の毛で押し通すには無理があるが、何もしないよりはマシだと信じた。

幻想郷の避難領域アジールたる人里にあって、内部への妖怪の立ち入りや、戦闘などは禁止されている。表立った敵対行動さえなければこの手の決まりは割合とザルなのが実情だが、一応は守っておいた方が万一のトラブルになった時に役立つものだ。

（よし、まずは――）

と、まあ涙ぐましい努力をしようとした蛍妖怪であつたのだが。

「よいしょ！ もー、何するのよ！ これじゃ何も見えないじゃない！ ああ、すみませーん！ そっちの人達！」

ボタンを内側から弾き飛ばし、制止も無視してポケットから飛び出した針妙丸が、ぴよんと地面を跳ねて宴会中の老人たちの輪の中へと飛びこんでゆく。

「おんや、小人のお嬢ちゃんじゃないか。どうしたんだい」

「どうもこうもよ。ねえ、これっていったい何の騒ぎなの？」

突然乱入してきた小人の姫に、しかし彼等は驚くでもなく、孫にでも接するように破顔し

ていた。どうやら彼女、すでに里でもかなり顔が知られているようで、人間達にはかなり好意的に迎えられている。とても異変の首謀者だったとは思えない。

老人たちに囲まれてちやほやされながら、針妙丸は腕兜をびよこんと跳ねさせ、リグルを手招きした。

「ほら、ぼーっとしてないで、あなたも一緒に聞かなきゃダメでしょ!」

「……うん」

いまいち釈然としないものを感じながらも、促されるままリグルは宴会の場に加わった。

まあ目出度いとりあえず御馳走ださあ飲めやれ吞めと四方から押し付けられる酒杯を適当に受け流しながら、彼らの話を聞くとところによれば。

この、常世神^{トヨカミ}というのは、一月ほど前から里で広まりはじめた新興宗教であるという。その御神体は橘の樹につく緑色の幼虫であり、これを祀れば人々には新たな富がもたらされ、老いや病に苦しむ人々もたちまち若返り、健康になるといったらしいんだが、常世神さまにお願い

をしたら見違えるように元氣になったそうだな」

「うちの婆様も長年のリウマチが治ってのう。有り難い事じゃ」

実際に起きたという噂話を伴って広められたこれらの現世利益は。特に老人たちを中心に、して大いに持て囃され、里人は次々に常世神を祀るようになったという。その神徳のあらた

かなことは確かで、いまでは多くの者達が仕事をほっぽり出して毎日宴会に騒ぐ始末。

大通りには虫を祭るといふ清座しきい——熱心な信徒となった里の大工が建てた白木の社殿が聳え、象徴の白旗と、神饌たる橘の葉を捧げられて、日参する者たちは引きも切らないということであつた。

「本当に信じられてるのねえ」

「……うん」

列を成して詰めかける参拝者たちの、途切れる様子のない人ばかりを遠く眺め、リグルは触角を寄せて複雑な顔。針妙丸も受け取った杯をふはあと飲み干し、

「うーん。現世利益に不老長寿なんて聞いたことないけど、そんな虫が本当にいるのかしら？」

「私も聞いたことない……と思うんだけどなあ」

「もう、しっかりしなさいよ。あなたが王様なんですよ？」

腰に手を当てる怒る針妙丸だが、リグルの表情は晴れないままだ。

煮え切らない態度の蚩妖怪に、小人の姫はもうと頬を膨らませる。
ちょうどその時、にわかに大通りが騒がしくなった。

「おお、御出でになられたぞ！ 常世神様じゃ！」

「こうしちゃおれん、行くぞ！」

「わわっ!!」

早速立ち上がった老人たちは宴会の席を放り出し、我先にと通りへと駆け出した。通りにどっとあふれ出す人々に押しのけられ、リグルは雑踏の中で揉みくちゃにされてしまう。

たちまちできる人だかりの中、人々は一斉に膝をついて祈り始める。

程なくその混雑の向こうから、橘の枝と白旗を掲げる白い貫頭衣の一団が現れた。数はざつと十人ほど。全員が白布で顔を覆い、蓑と笠を目深にかぶった不思議な装いだ。

歩く彼らはその胸に、白い布に包まれた虫籠を抱えている。

「あれね」

「うん」

恭しく虫籠を頂いて、整然と進む信徒たちの行列。それを前に、雑踏に紛れるように距離を取りながら、リグルはじっと目を凝らす。紋白蝶モンシロチョウの複眼をもってズームアップした先、一抱えもある虫籠の中には、青々とした橘の枝が収められ、その葉に齧り付いている緑の芋虫を見ることができた。

噂通り、緑の身体に黒い斑模様の、一見してただの芋虫でしかない。しかし人々はその小さな虫に首を垂れ、手を合わせて一心に祈り、また、与えられた恵みに心から感謝をしている。ありがたやありがたやと涙まで流して崇める姿まで見られる。

ただの虫に対しては、決して見られることのない光景であった。

(……………)

リグルとしては、胸中穏やかではない。

虫というのは、食物連鎖の下位に置かれ、容易く命を奪われてしまう生物である。見た目や姿が気に入らないからというだけで殺されてしまうことも少なくない。かつて大量発生した蚊ヤブカや蠅馬カマドワマの問題で思い知らされて以来、リグルとしても心を痛めていることだった。虫を率いる長として、リグルは今、無暗に虫を殺されたりしないよう、目下イメージアップ活動に奔走している最中である。

（……でも、これ……）

こうして、一介の虫が人間たちの信仰を集め、多くの人々を傳かせて栄えることは、虫の妖怪としては、確かに歓迎すべきことなのかもしれないが。

（なんか、ちがう気がする……）

言葉にすることのできない違和感が、棘のように喉に引っ掛かっていた。ざわざわと落ち着かない胸元を握り締め、リグルは知らず、唇を噛む。

「ねえ、ちょっと」

「ひゃんっ!？」

物思いに耽っていたリグルの触角が突然引っ張られる。ぴよんとポケットから飛び出した針妙丸の小さな手に、敏感な先端を握られて声を上げかける蛍妖怪。

その口を小人の姫は両手で塞いで、声を潜めて耳元で囁いた。

「まったくもう、もうちょっとしっかりしなさいよ。ねえ、それよりあなた、あの虫の声を聞こえる？」

「え」

そう言えば。

言われて我に返ったリグルは、改めて虫籠の中へと意識を向けた。触角を動かし、様々な信号で呼び掛けてみる。

虫の声というのは、わかりやすい鳴き声に限ったものではない。昆虫の優れた感覚器官である触角や耳が捉えるのは、温度や風、匂いやフェロモン等の様々な媒体を経た複雑な意志伝達である。しかし――触角のタイプを次々に切り替えて、様々なチャネルから呼びかけてみても、虫籠の芋虫からはそれらしい応答が返ってこない。

それどころか、芋虫が発している言葉も、リグルにはうまく聞き取れないのだ。

「……ダメ、聞こえない」

「あなたもなのね。……私だけならって思ったけど、虫のリーダーとも話ができないって、おかしくない？ あいつ、一体なんなの？」

針妙丸の言う通りだった。人間達にかしづかれながら、虫籠の中で橘の葉を食み続ける緑の芋虫に、リグルはまるで見覚えがないのである。

（蝶……ううん、蛾かなあ？ でも、私の知らない虫……？）

特徴だけを抜き出せば揚羽蝶アゲハチョウに近いようにも思えるのだが、やはり違ふ。常世神と呼ばれるあの虫は、リグルの知っているどんな虫とも姿が重ならない。しかしそんな存在は有り得ないはずだった。リグルは虫の王であり、一族を率いる長である。幻想郷に住むいかなる虫の事であっても知ることができる。

その権能が通じない、それはつまり――
膨らんだ疑念に、リグルが首を捻っていたその時である。

「やあやあ！ われこそはこの人心を惑わす邪宗を糺すものなり！」
朗々と響く声とともに、やにわに向こうの通りが騒がしくなる。

ざわつく人混みを押しのけるようにして現れたのは、すらりとした長身をチェックの上着と膨らんだスカートに包んだ少女だった。その手に靈力で編んだ青白い薙刀を握り締め、力強く石突きでどんと地面を叩く。

「民を惑わす邪宗の輩、蠅聲さばえなす邪神あしきかみめ！ こうして我々が来たからにはもう好きにはさせないぞ！ おとなしくここで滅びるがいい！」

面霊気・秦ころ。先の心綺楼異変の首謀者である彼女は、周囲を威嚇するかのようにくつもの能楽面を浮かび上がらせた。ぐるぐると回転を始める喜怒哀楽の面の中、鮮やかな桃色の髪をなびかせ、手の中の長大な得物を力任せに振り回す。

ほったらかしになっていた宴席の卓や盃が、薙刀の刃に薙ぎ払われて宙を舞った。

「な、なんだあ!？」

「危ねえぞ、逃げろ逃げろ!」

たちまちそこから悲鳴が上がった。集まっていた群衆が蜘蛛の子を散らすように逃げ出す中、面霊気は肩を怒らせ、ずかずかと大股で大通りを進み、白装束の一団へと近付いてゆく。

「ちよっと、今度は何はじめたのよ、あのお面妖怪!」

「知らないよ!」

逃げ惑う人々、様子を見ようとする野次馬達。ごった返す混乱で騒然となる通りの中、常世神の信徒たちは虫籠を庇うように前に出る。

「な、なんだ貴様は! 常世神様の御前であるぞ!」

「うるさい! どけ!」

一喝と共に、面霊気の手元で霊力が膨れ上がる。駄々漏れになった霊気が爆発するように放出され、霊撃となって信徒たちをまとめて吹き飛ばす。

折り重なって倒れた信徒たちを一瞥し、面霊気は薙刀の切っ先をその眼前に突き付ける。

「世を乱す異界の虫め! とうとう遙かこのような地の果てまでやってきたというのか! だが、我々がいる限り好きにはさせない!」

面霊気はお面の付喪神だ。彼女の周囲には感情をあらわす六十六の面がぐるぐると舞い踊

り、周囲を威嚇するように見下ろしている。そんな中、彼女の顔を覆うのは、喜怒哀楽のいずれとも違う厳めしい面。

「この秦^{はた}の面にかけて、お前の企みはまるっとお見通しだ！ これは正義を執行する表情！」
高々と宣言したところは、周囲を巡る面の中から獅子頭を引き出した。大きく胸を反らして息を吸い込んだ彼女の面の口から、ちろちろと赤い炎がこぼれ――

「ちよ、ちよっと待って！」

矢も楯もたまらずリグルは飛び出していた。虫の王の号令一過、呼び寄せた虫を弾幕にし、通りに蹲った信徒たちと彼女との間に割って入る。

地面を鋭く跳ねた弾幕の群れは、燃え盛る炎にも物怖じせず、面霊気の顔に向けて飛び掛かる。かぶった獅子面の上から虫に集^{たか}られ、面霊気は顔を覆って薙刀を振り回した。ごとと吹きだす炎はあらぬ方向へと反らされ、初夏の空を焦がした。

「ぬ！ なにをする！ 邪教徒めが邪魔をするのか！ これは憤激の表情！」

あくまで本人の顔は無表情のまま、珍妙なポーズで糾弾の声を上げるころ。

「こっちの台詞！ こんなところで騒ぎなんか起こしたら、巫女がすっこんでくるでしょ！ 人間達だって巻き込まれちゃう！」

「多少の犠牲はいたしかたない！ この虫を討伐するのは、太祖より我々に課せられた崇高な使命なのだ！ 邪魔をするなら容赦はしないぞ！ これは決意の表情！」

「あーもうっ！ 話を聞けーっ!!」

話を聞く様子のないころに對し、リグルは咄嗟にスペルを掲げ、なかば一方的に符名を宣言した。

——灯符「ファイヤフライフェノメノン」

ルンオウ・クルキアヌ
皇祖蚩の王の喚起に応え、たちまち終結する無数の配下達。明滅する光が、四方から現れては次々にこころを取り巻いた。面靈氣は靈力の薙刀を放棄し、代わりに一對の大扇を編み上げてその媒介となる蝶や虫を撃墜していく。

人里の中での戦闘は禁じられているが、その唯一の例外が弾幕決闘だ。スベルカード・ルール 命名決闘法に則った弾幕勝負ならば、状況次第では許容されうる。もちろん、周辺に被害を出さないことや、双方の合意など、様々な条件はあるが——リグルがしたことは、強引に命名決闘の状況を作ったところの暴走を押さえこまんとするものであった。

「この程度で、我々を止められると思うのか!」

気炎を吐く面靈氣。實際その勢いは凄まじく、灯符の蚩弾幕は次々にその数を減らしていく。——しかし、それは織り込み済みだ。

「お願い、今のうちに!」

「——はいはい。これって反則じゃないのかしら」

「いいから早く！」

短いやりとりののち、ひゅんと宙を走る小さな影がある。

蛍の輝きに紛れ、雄の甲虫カブトムシの一匹に飛び乗って宙を奔った針妙丸は、即座に腰の針剣を抜剣しながら面霊気に肉薄していた。一寸法師譲りの剣技ですれ違いざまにこちらの目元を突き、手首に一撃を加えて握る扇を叩き落とす。

「ぐっ」

顔と手首の痛みに、彼女の注意が反れたところへ、リグルはファイヤフライフェノメノンの弾幕を集中させた。溢れるルシオラの光、地上の恒星の輝きが通りに満ち、煌々と灯る。そして。

「そお——れええいっ!!」

「おおっ!？」

直後には、疑星の輝きを閃かせて飛んだ釣り針が、面霊気の全身をしっかりと絡めとっていた。釣り糸にぐるぐる巻きにされて手足を拘束されたところは、周囲のお面ごと一本釣りにされ、小人姫の掛け声と共に宙を舞う。

「このお、離せ！ 卑怯者め！ これは抗議の表情！」

「話はあっちで聞いわよ！」

宙吊りにされてもがく面霊氣に言い返し、何はともあれ巫女が飛んで来る前にと、リグル達は脱兎のごとくその場を駆け出していった。



——数分後。

里を横切った西の端、人氣のない倉庫が立ち並ぶ運河の一角。

柳の根元に縛りつけられ、丁寧に面の一枚一枚までテグス糸で絡め取られたところは、なおもじたばたともがきながら鋭い（つもりであろう）視線をリグルへと向ける。

「これはいったいどういうことだ！ 二対一とは何たる卑怯！ 私をこうやって卑劣にも捉え、あまつさえ支配するつもりなのか！ そのような脅しには断じて従わないぞ！ これは絶対に負けたりしない表情！ くっ、殺せ！」

こころの憤激に合わせ、縫い止められた周囲のお面たちもばたばたと揺れる。

人目を避けて駆け込んだ運河の畔で、なおも騒ぎ氣炎を上げる面霊氣に、文字通り全身で抗議を訴えられ、針妙丸は呆れて吐息。

「ちよっと落ち着きなさいっての。あんなところで人間襲ったらどうなるか分かるでしょ。また退治されたいわけ？ ……それにあなた、前に三対一で戦ってなかったっけ？」

「……………。それはそれ、これはこれの表情！」

「ごまかすな！」

針妙丸の鋭いツツコミもなんのその。面霊気はなおも手足をばたつかせ、

「ええい、今はそのような事は関係ないだろう！ 私は激怒した！ 必ずやの邪智暴虐の虫を滅ぼさなければならぬ！ これは我々に与えられた崇高なる使命なのだ！」

「……ねえ、この子ってこんなだったかしら？」

「うーん。前はもう少し大人しかったような気がするけど」

小人と蛭は揃って顔を見合わせる。リグルも、こころと直接の面識があるわけではない。博麗神社の舞台を、ミスティアやルーミアたちと一緒に見物に行った程度だ。しかしその時は至って落ち着いた様子であり、次々披露される演目もおおむね好意的に受け入れられている様子だった。

件の心綺楼異変が終結して以降、彼女は能楽師として、何度も博麗神社の特設舞台で能楽を披露していた。天狗や河童に気に入られ、妖怪の山での特別講演の経験もあるという。

生まれただで感情を制御できず、人里を襲っていた時ならばともかく、このように暴れ出すような素振りはない、いたって無害な妖怪だったはずだと、針妙丸もそれに頷く。

「離せ！ かの虫は世を乱す邪神に間違いないのだ！ 討伐は我々の責務であり、秦の系譜を継ぐ我々に課せられた使命なのであるぞ！」

「……ねえ、ちょっと思ったんだけど」

一向に落ち着く様子のない面霊氣に、リグルは肩の上に針妙丸を呼び寄せ、そっと耳打ちする。ふむと頷いた彼女は、何処からともなく黄金色の小槌を振り出した。

「えいっ」

可愛らしい声と共に、小人の姫はそれを一振り。

しゃりんしゃりんと鳴り響く宝具の音に合わせ、やがてここから柔らかなピンク色の靄のようなものが溢れ出す。それはふわふわとあたりを漂いながら、小槌の胴の中へと吸い込まれていった。

同時に、面霊氣はぴたりと動きを止める。急に弱々しくなった抵抗と共に、こころの顔を覆っていた面の一枚が、からんと剥がれて落ちた。

「……む」

「あ、落ち着いたみたいね」

予想は的中。どうやら、全部ではないにしろ、下剋上異変で道具たちを活性化させた靈力が彼女にも残っていたらしかった。憑き物が落ちたかのように穏やかな氣配を取り戻した面霊氣は、きよろきよろとあたりを見回して怪訝な顔。

「……、私はなにを？ この感情はいったい……」

「良かった。なんだかさつきから様子が変だったのよ」

「……確かに、少し前までの私はなにかおかしかったような気がする」

気がするどころではなく明らかにおかしかったのだが、本人にも一応の自覚はあるらしい。一応念のためと、拘束の糸は解かないままで、リグルは心の前にしやがみ込んだ。

「平気？」

「うん。よく分からないが迷惑を掛けてしまったようだ。こころ反省」

しゅんと俯く面霊気。その視線が、地面に落ちた面へと向けられる。

「……この面は」

「どうかしたの？」

面霊気・秦こころを形作るのは感情を表す六十六枚の面である。喜怒哀楽に始まる無数の感情、ひとつひとつが彼女の一部であり、それらは希望の面というひとつの核によって統括されている——はずなのだが。

まじまじと地面に落ちた面を見下ろし、こころは首を傾げた。

「この面はなんだろう」

「なんだろうって、あなたのお面でしょ」

「しかし、私は——我々はこの面に心当たりがない。……こころなのに心当たりがないとはこれいかに！ うむ、これはうまいこと言ってやったの表情！」

何やら手ごたえを感じたか、絶妙のドヤ顔角度を示してみせる面霊気。

それには取り合わず、針妙丸はぴょんと彼女の膝の上に飛び乗った。

「そんなことより！　ねえ、さっきから言ってるその使命ってのはなんなの？　あの常世神ってやつのこと、何か知ってるの？」

「……かの虫は常世の者。異界より訪れ国を乱す蕃神そとつくにのかみである。民の安寧を脅かし、秩序を妨げて平穩を乱す敵なのだ。私は秦はたに連なるものとしてこれを討伐し、混乱を治めねばならない。……そのように、定められているのだ」

「……秦？」

「聖徳王の腹心、秦河勝公——はたのかわかつこころさんの生みの親とされている方ですよ」

見計らったかのように、背後から声がかかる。二人が揃って振り向けば、そこには切り揃えた神に一輪の花飾りを付けた乙女が一人。

「良かった。騒ぎが起きていると聞いて、もしかしたらと思っていましたんですが」

慌てて走ってきたのであろう。肩を上下させ胸を押さえながら、稗田阿求——幻想郷の阿礼乙女は、ほうと大きく安堵の息を吐いた。



稗田家は、霧雨商店や朝倉時計店などと共に、人里の有力者のひとつであり、歴代の御阿

礼の子を輩出する名家である。今回の常世神の流行についてはいち早くその動向を察知し、明らかに怪しいと判断して、自警団と連携して手を打っているところであったという。

「以前から推測はしていたんですが、先程のころさんのお話を聞いて確信しました。あの虫——常世神は、かつてこの国に現れたとされる神です」

自警団の上白沢慧音——ワーハクタクたる里の守護者が、かの虫の正体を予見していたという。リグル達と揃って連れ立ちながら、阿求は事のあらましを説明してゆく。

「日本書紀によれば、皇極三年（六四四年）の秋七月に、東国富士川の辺にて、住人の大生部多^{おのおほ}がある虫を祀ることを村里の人々に勧めたという記録が残されています。曰く、『此は常世の神なり。此の神を祭る者は、富と壽^{いのち}とを到^{いた}す』。この言説を土地の巫覡^{かんなぎ}が広め、新しい富と不老長生や若返りを与えてくれるという託宣をしたため、人々は多くの財産を常世神と名付けられたこの虫に捧げ、清座^{しきい}に祀り、大いに歌い踊って祝ったそうです」

「さっきの連中と同じね」

「ええ。ところがいくらこの虫を祀り崇めても、一向に新しい富など入ってこなかったことから、常世神の祭祀は世を乱す騒ぎとなり、民は大いに苦しめられました。かくしてこの元凶たる虫と、大生部多を討伐するため、聖徳王の腹心であった葛野の秦造^{かどの}河勝^{はたのみやつこ}が派遣され、事態は治められたと伝わっています」

視線を向けられ、こころは『わたし！わたし！』と強くアピール。別に本人ではないの

だけれど、そこは誰も突っ込まない。

「つまり、その虫が幻想郷にやって来たってこと？」

「九分九厘その通りでしょう。秦の使命というのは、おそらくこころさんの面を作った秦河勝公の意志。……先程の面を見せて頂けますか」

「……うん」

多少警戒の色は滲ませながらも、こころは素直に面を差し出す。受け取った阿求は片目を閉じてそれを検め、しばしの後にひとつ頷いた。

「この面はおそらく、河勝公の姿を映したものです。恐らくはこのような事態に備えて、安全対策のために残されたものではないでしょうか」

それがこの危急に際し、自動的に起動してしまったのではないかと阿求は推測を述べた。

『『太秦は ^{うつまさ}神とも神と 聞え来る 常世の神を 打ち懲^{きた}ますも』。この常世神討伐と騒乱の

平定は、秦河勝の大きな業績の一つとして史書にも記されています。常世神の出現は、折しも聖徳王らが道筋をつけ始めた、仏教国家の形成の最中での出来事。中央集権を目指す国の方針と真っ向から対立するものです。聖徳王の腹心であった河勝公が自ら平定に赴かなければならなかった一大事だったのでしょ」

「うーん。……そうなのだろうか。神子は何も言ってなかった気がする」
「亡くなった後の事ですからね」

阿礼乙女はこほんと咳払いをひとつ。

『此の虫は常に橘の木に生る。或いは曼椒ほそきに生る。其の長さ四寸餘、其の大きさ頭指許おほゆびほど。其の色は緑にして有黒點くろまだらなり。其の兒こたち、全もはら養蠶かりごに似れり』。

虫の正体が何であつたのかは、いまだに解決を見ていません。一説には、常世神とは揚羽アゲハ蝶てふであり、橘の木——田道間守たちまもりが常世国より持ち帰つた不老不死を与える非時ときじく香菓のかくのみを食たひ荒らす虫であつたとも。あるいは、楠蚕クスサン、楓蚕フウサンのような野蚕であり、当時、養蚕によつて重要な地位を占めていた秦氏が、自分たちの權益を乱すことを許容しなかつたからだともされてゐますが」

「ああ、そっか！ 新しい織物がつてのはそれだったのかも！」

リグルの頭の上でぼんと手を叩く針妙丸。常世神を崇める者たちは、こぞつて揃いの白い貫頭衣に身を包んでいた。あれは常世神の信仰をあらわすものであつたのだ。

「阿求は、その神様に里を乱されるのが嫌つてこと？」

「それもあるんですけどね」

そう言つて、阿求はここですと足を止めた。倉庫街の外れにある平屋の建物を示し、大きな錠前を開けて先を促すように中へと入っていく。

リグルも続けてその入口をくぐる。建物の中は埃っぽく、雑然としていた。がらんとした天井の高い屋内には、濃い緑の残り香と、萎れた桑の葉が散乱し、斜めに傾いた棚の上には

葉縄あみやまぶし、使われていない座繰機などが粗雑に押し込まれたまま放置されている。

「これ……?」

「実のところ、私もリグルさんを探していたんです」

「私を?」

「ここは、里で養蚕を営む者たちの蚕屋かいこやです。ちょうど今は春蚕の最盛期のはずなのです」

言いながら、阿求は無人の建物の中を示してみせた。

荒れ果てた屋内には人の手が離れていることが明らかで、敷き詰められた棚の上、萎れかけた緑の葉の上に、わずかな数の蚕達が身を寄せ合うばかりだ。ずんぐりとした白い虫たちは弱り切って、糸を吐く力も、餌の桑葉を齧る元氣もないままにじっと動かない。

もう何日もの間、この蚕達は世話をされていないのだ。

「リグルさんには釈迦に説法かもしれませんが、蚕は人の手を借りねば生きていけない虫です。独力では木の枝を這うことも、餌を見つけることも出来ない。生まれてから死ぬまでの全てに人の助力を要し、その代わりに絹糸を吐く糧となります。だから、世話をするものがないくなれば、たちまち死んでしまう。」

この職工頭は、昨年末に孫娘を亡くしたばかりでした。不幸な事故で、どうしようもなかったと言います。……ですが、だからこそ諦めきれなかったのでしょうか。不老長生、新た

な命を与えるという、冷静に考えれば眉唾ものの信仰に飛びついてしまった。幻想の流れ付くこの郷にあって、未だ見ぬ常世の神であれば、死んだ命すら取り戻せるのではないかと。そう縋ってしまったのです」

「それって——」

リグルの疑念を遮るように、阿求は言葉が続ける。

「ええ。彼は今、熱心な信者として、常世神に仕えています。……あの虫がそうさせているのかもしれない。こころさんの言う通りの異界の虫であるならば、それくらいの力があっても不思議ではないでしょう」

今更確認するまでもなく、絹糸は里の衣服を占める重要な産業である。衣食住のうち、一角を占める必須要素。妖怪としてその例外ではなく、これが失われてしまえば、人里はおろか幻想郷全体の大きな損失になることは間違いない。

常世神は、それを乱す存在であったのだ。

——そして。

「事はそれだけに留まりません。もしも。彼の願い通り、一度は失われた命が蘇るのならば。里の中で、人が人ならざるものになるのであれば。それは人妖の境界を侵すことに他ならない。人里最大の禁忌がなんであるかは、あなた達も知っているはずですよ」

人間が妖怪になること。

全てを受け入れる幻想郷にあって、唯一の例外がそれだ。それを侵さんとするものは、過去何度となく、無慈悲に討伐されてきた。

「だから、どうしても念には念を入れなければならなかった。虫の王が配下の虫達を従えるように、人の心をその囁きで自在に操る虫——蠅さばえな聲あじきのみす邪神。その危険性は量り知れません。騙すようなことをしてすみませんでした。……あなたが虫の王の立場で、常世神に助力するような事態だけは、阻止しなければいけなかったんです」

屋内の四方の景色がぐにやりと歪んだのはその時だった。
食いべいらいれいていたい歴れ史しが、元もとのの姿すがたにかえる。

「ちよっと、何!？」

ワいハいクいタいクいのい歴れ史し食くいだ。気付けばリグル達は取り囲まれていた。

手に手に武器や呪符を構えて並ぶのは里の自警団たち。戦鬨に立つのは鏡と剣、珠を掲げた上白沢慧音。隣には小兎姫、明羅の姿も見える。いずれも名だたる妖怪とも渡り合える、人里の実力者揃いであった。

「慧音先生……?」

「すまない、リグル。しばらくそのまま置いてくれ」

目を伏せ、後ろめたさをにじませる慧音。ぐるりと周囲を見回し、般若面をかぶってこころが憤激をあらわにする。

「どういふことだ！ 私達をどうするつもりだ！」

「大人しくしててください。このまま何もせずにいてくれれば、あなたたちに危害を加えるつもりはありません。そもそも、ここらさんと針妙丸さんは、行きがかり上偶然巻き込んでしまったようなものですからね」

「……靈夢ね」

ぼそりと。事態についていけず困惑しているリグルの頭の上で、針妙丸が低くつぶやく。

「神社に姿が見えないから、ヘンだと思ってたの。里に居るならあの騒ぎで出てこないのも妙だし。……リグルを確保するまで、どこかで待機してた、とか？」

阿求は答えない。その無言が、指摘の的中を何よりも明白に示していた。

こうしてリグル達を拘束し、事態を混乱させる不安要素を排除しておいて、その間に博麗の巫女が常世神を討伐する。そんな筋書きがあるのだろう。

「待ってよ阿求！ 私は別に、そんな……！」

「そんなつもりはない、と？ 言い切れますか。あなたが同じ虫の妖怪として、虫の王として。同族を討伐する巫女の敵に回ることはないと。その言葉を、私達が信用できると思っていますか」

鋭い指摘。反射的に飛び出しかけたリグルの目の前を、明羅の大太刀と小鬼姫の黒十手が遮る。ぱりりと籠った靈気が、リグルの前髪の数本を焦がした。

「里を守る立場として。これは万が一にも妥協のできないことです。……リグルさん。どうかこのまま、時間が来るのを待ってください」

「……」

ぐっと歯を噛み締め、言葉を飲み込むリグル。

違うと叫ぶのは簡単だった。そんなつもりはないと言うのだって容易かった。けれど、ここを飛び出すということはつまり、人妖の境界を侵し、人間に害なす常世神に加担し、人達との敵になることを宣言するに他ならない。

（そんなの……っ！）

異界の虫。常世の蟲。それはリグルにとっても異質な存在だ。言葉も通じず、姿も見知らぬ異邦のモノ。守るべき相手ではないのかもしれない。

突き付けられた決断の前に、リグルはただ動けずにいた。黙って見過ごしていればいいのか。本当にそれでいいのか。虫の王たる責務と、一妖怪としての立場が、困惑の中、竦む手足を絡め取る鎖になって少女をその場に縛りつける。

「つまり。博麗の巫女があゝの邪神を滅ぼすまで、我々に黙って待っているということか」

「……………」

こころの問いに、阿求は沈黙をもって答えた。

「そっか。……ねえ、どうする？」

軽い口調に、はじめ、リグルはそれが自分に向けられたものだとは思わなかった。

「……え？」

「どうしようか？　なんか、私達は巻き込まれただけみたいだから、どっちでもいいわよ」それは。あまりにも自然に。

全ての決断を、リグルに委ねる言葉だった。小さな体にいっぱいの勇気を湛え、英雄の末裔は、小さな手のひらをリグルの指へと重ね、虫の王の言葉を待つ。

「私は……」

ざわり。自警団たちに緊張が走る。早々と抜刀した明羅が、阿求を庇うように前に出た。周囲の動揺をよそに。リグルはじっと、小さな手を握り締めて、高鳴る胸の鼓動を感じていた。虫の王。一族の長の使命。そんなものとは関係なく、蛍妖怪の心は力強く震える。

「私は」

決意の輝きが少女の胸に灯っていた。

いや、それは最初から、少女の胸に宿っていた輝きだ。空に輝く金星と同じ、妖怪達の希望、偉大なるルキフェルの輝き——地上の恒星たる、輝く蛍火。

蛍。人がまだ、この地に満ちるよりも遥かに昔から、葦原の中つ国に住まい、朽草の中より這い出てその輝きで言葉を交わし、神遊んだ夜光の蟲。

だから、たとえ相手が蠅聲^{さばえな}す邪神とて、構わない。

「私は、このままじゃ——いけないと思う。あの子に会って、話をして……確かめたい!」
「そうこなくっちゃ!」 「面白くないな!」

蚩妖怪リグル・ナイトバグの静かな決意と。即座に動いた里の自警団たちと。

それを阻止せんと放たれたまばゆいばかりの黄金の一撃と、

四方八方に吹き荒れる蜘蛛糸の滝が、蚕屋の中を満たすのは。
まったく同時の出来事だった。



あまり根拠のない自信であったことは否めない。

けれど——もう事態は動き出していた。壁をぶち抜いた蚕屋を後に、リグル達は運河脇の倉庫街へと転がり出した。

「急いで! 時間ないわよ!」

「わかってる!」

ポケットから急かす針妙丸に言い返し、リグルは背中にマントを広げ、鋭く地を蹴って空へと飛んだ。

「こちらは任せろ!」

こころは感情を呼び起こす面を次々と取り出しては撃ち出し、自警団の追撃を牽制する。阿求たちを巻き込んでしまった以上、もはや躊躇の余地はなかった。

「わかった、先に行くよ！」

短く言い残したリグルは、雀蛾^{スズメガ}の羽根に変えたマントで空を駆ける。里を横断し、白旗の

立ち並ぶ西の大通りへと高速で飛翔。

触角を巡らせ周囲の様子を確認しながら、人の集まる大通りを強引に突き抜け、端に見える建物——常世神を祀る清座を目指す。通りの辻に建てられていた分社を二回りほど大きくした印象の建物は、良く見れば民家を改造したものであるらしい。

「あそこが連中のアジトね！——見て！」

針妙丸が腕兜を押さえて指差した。

橘の木と白旗に囲まれた社殿の周りに、立て続けに霊撃が迸っていた。残像を引いて飛ぶのは、赤く縁取られた霊符。地面を跳ね転がるは、紅白二色の陰陽玉。白服の信徒たちが次々と吹き飛ばされ、乱れ飛ぶお札によって問答無用で叩き伏せられていく。

リグルの複眼が、青い空を泳ぐように飛ぶ、紅と白の二色を捕える。

誰よりも自由な少女。幻想郷の調停者。——博麗の巫女。

「……うわあ」

「遅かった……！」

針妙丸が悔しさを滲ませて叫ぶ。すでに、靈夢は常世神の討伐のため本拠に乗り込んで
いる。

間に合わなかった。怯えと驚きに一瞬止まりかけた身体を、強く首を振って振り切って。
リグルはまっすぐ、常世神の社殿の前へと跳び下りた。

「な、なんだ、お前達は!？」

大通りの突き当たり、広場には混乱が満ちていた。次々繰り出される退魔の弾幕の中、新
たな乱入者に驚き、白服の信徒たちがわらわらと駆け寄ってくる。中には警戒も露わに、物
騒な得物を手にした見張りの姿もあったが――

「悪いが今お前達の相手をしている時間は無い! これは不退転の表情!」

遅れてやってきたところが、空の上で叫ぶ。面霊気はすかさず被った怒りの大蜘蛛面から
白糸を滝のように投げ下ろし、信徒たちを絡め取った。本場地底仕込みの土蜘蛛糸によって
雁字搦めにされ、身動きが取れなくなって折り重なるように倒れ込む信徒たちを押しわけ、
リグル達は社殿へと向かって走る。

「あっち! この奥よ!」

針妙丸は針剣を抜き、リグルの肩上で先を示した。既に開け放たれていた社殿の入り口、
靈符まみれになって倒れ伏す人々を飛び越え、さらにその奥へ。

廊下を走り、階段を駆け上り。大きな襖を押しあけた先。広々とした拝殿には、怯え固ま

るように身を寄せ合う数名の信徒達と——お祓い棒と霊符を手に対峙する、博麗霊夢の姿がある。

「霊夢！」

「……ああ、余計なのが来ちゃった」

心底面倒くさそうに、博麗の巫女は大きなため息をつく。

「ちゃっちゃと終わらせるつもりだったのになあ」

無造作に。有無を言わせぬ調子で霊夢が放った五枚の霊符は、たちまち数十枚、数百枚と変じてリグル達に襲いかかった。それぞれが生き物のような複雑な軌道を描いては、容赦なく張り付き、自由を奪う博麗の符を、蚩妖怪と小人は地面を転がりながら避ける。

「わあああ!？」

「ちよっと、霊夢、やめてよ!」

「邪魔しに来たんでしょ。止めないわよ。大人しくしてるんなら、苦しまないように退治してあげる」

びよう、と風を裂いて。巫女が振るったお祓い棒は、辛うじて追尾の霊符の群れを避けたりグルと針妙丸をまとめて打ち据えた。それぞれ広間の端まで吹き飛ばされ、壁に叩き付けられて咳き込む二人を背に、博麗の巫女は社殿の奥へと向き直る。

「こ、これは、一体——?」

信徒たちの中央、初老の男が呻くようにつぶやいた。

恐らくは、彼が阿求の言っていた職工頭なのだろう。他の信徒たちと同様、白の貫頭衣を身に纏い、笠を被った彼は、怯えた様子で博麗の巫女を見つめる。

「その妖怪を退治しに来たわ」

「よ、妖怪など……これは、常世よりの神というものでして——」

「そのどこが神様なのよ」

男の言葉をばっさりと切り捨て、霊夢が視線を放る先。

社殿の奥、橘の枝や御饌などの供物を山と積まれた祭壇の奥には、巨大な繭がでんと横たえられていた。部屋のほぼ半分ほどを占める大きな白い糸の塊は、どくどくと脈打ちながらわずかに上下を繰り返している。

陽の光を浴び、虹色に輝く繭は、明らかにこの世のものではない。

「おお！　なんと面妖な！　……やはり、これは世を乱す蕃神だったのだな」

外の連中を相手し終えたか、遅れて入ってきたころも声をあげる。霊夢はちらと横目で面霊気を見、また面倒なのが増えたときしゃくしゃと髪を掻きむしった。

「いずれにしても、里の妖怪は見過ごせないわ」

「お、お待ちください！　巫女様、これは決してそのような怪しいものではありません！　こ、これにおわすは、我々に救いを与えてくださる霊験あらたかな神なのですぞ！」

「話にならないわね」

靈符を退魔針に持ち変え、一步を踏んだ靈夢に対し、腰を抜かしていたはずの男が立ち上がった。膝を震わせながら、両手を広げてその前に立ちはだかうとする。

「う、わ、あああああー!」

目を閉じ、錯乱して巫女に飛びかろうとする男。

だが、博麗の巫女はそれに頓着しなかった。

鋭く手首を返し、二尺近い長さに伸びた針を、繭めがけて投げようとする。

『——える?　ねえ、あなた、聞こえる!?!』

強い声が、社殿の中を打ったのはその時だった。

ぼうと灯る輝きが、次々と社殿の中に溢れ、光の尾を引いて浮かび上がる。

『あなたと話がしたいの!　答えて!　お願い!』

強い叫びは、繭へと向けて。ぼつぼつと灯る蛍の輝きが、男と靈夢の間に割って入る。

同時、どくと力強く、繭が脈動した。

虫の王に導かれ、見る間に溢れ出す星の輝き。その身に蛍火の放つ金星の輝きを纏い、リグルはあらゆるチャンネルを駆使して社殿の奥、常世神の繭へと呼びかけていた。

——蠱符「リトルバグストーム」

突然の乱入を前にしても、巫女の判断は迅速だった。即座に目標を切り替え、退魔の針を束ねリグルへと投じる。

「させないわよ！」

それに割って入ったのは針妙丸だ。小さな身の丈に一杯の勇気を溢れさせ、小人の針剣は風のように空を刻み、退魔針を弾き返す。

同時、こころが土蜘蛛面から糸を放射し、巫女の動きを封じるとともに、手元から姥面を呼び出して男達の顔に問答無用で押し付けた。面の力によって強制的に喚起された悲哀の感情が、男たちの自由を奪う。

「——、」

そして。

煌々と立ち上る光の渦、リグルのスペルの輝きに呼応するように、社殿を大きく軋ませ、巨大な繭の表面にびしりとひびが入る。

「あ」

という叫びは、誰のものであったか。網目模様の白い繭がぶちぶちと引きちぎられたかと

思われた次の瞬間。社殿の中を凄まじい突風が走りぬけた。

大気が爆発したかと思うほどの衝撃を伴い、白い影が空を奔る。

びよう、と疾った一陣の風は、入口近くにいたところを突き飛ばし、社殿を半壊させながら外へと飛び出した。

「っ」

即座に身を翻す紅白の巫女。針妙丸とリグルもすかさずその後を追う。

「面霊気！」

外の通りでは、押し潰されて半壊した小屋の残骸の中に、仰向けに倒れ伏すところがあった。胸に深々と一撃を受けた少女に駆け寄り、飛び跳ねながら揺さぶる針妙丸に、こころはううんと呻いて身を起こす。とりあえず、無事ではあるようだ。

「……大丈夫。面がなければ即死だった」

扇を広げて立ち上がり、無事をアピールするところ。

ほんと胸をなでおろす針妙丸の前に、串刺しにされ、真つ二つに割れた長壁面と獅子面が、がらんと地面に転がる。

軽口を混ぜているが、面霊気にとって面は己を形作る本体である。それが砕かれたということは、彼女の力と感情うちの何分の一かが失われたということに等しい。

「それより、あれを」

狐面を被り直したところが見上げる先。

里の上空に、激しい光の輪が閃いていた。

紅と、白と。二色の巫女装束を靡かせ、青い空を泳ぐように飛び、陰陽玉と霊符を次々に投じる巫女。それに対するのは、禍々しい茶と赤の彩りに、目玉のような模様を散らした大きな翅翼をもつ巨大な虫の化け物だった。

背中の翅の形は蛾シムシのようだが、その姿はどこか蝶カヘバにも似ていた。人に似た手足はのっぺりと白く、吹き流しのような翅先を震わせ、複眼と網目のような触角をざわりと揺らめかせる。

「—————!!」

触角を震わせ、妖蛾は声なき声で叫ぶ。

ばさり、巨大な翅が打ち下ろされると同時、突風が鮮やかな鱗粉を巻き込んで周囲に叩き付けられる。鼻をかすめる強い匂いに、リグルは咄嗟に触角と口元を覆い、針妙丸は慌ててリグルのポケットの中に身を潜めた。

猛烈に巻き起こる鱗粉の嵐。それに取り巻かれた人々は、途端に目の光を失い、焦点をぼやけさせてその場に立ち尽くした。

「毒!？」

針妙丸が叫ぶ。あるいは、人の心を侵し操る異界の蟲の権能。リグルが持つものと同じよう

に、常世神は人を支配するのだ。

そんな鱗粉の直撃を至近距離で浴びた巫女は、しかし些かも怯まない。空飛ぶ巫女の四方に張られた結界が、邪毒を含む鱗粉を寄せ付けずにいた。

反撃と投じた霊符が次々に妖蛾の身体を捉え、霊撃の爆発を引き起こしてゆく。

妖蛾は触角をくねらせ、人々を操って巫女を襲わせようとするが、霊夢はするりとそれを掻い潜ってしまう。あらゆるものから自由な幻想郷の巫女にとって、多数の力など何の意味も持たない。

「――、――！」

配下とした人間達が役に立たぬと悟った妖蛾は、一転空に高度を取り、加速して直接、巫女を狙おうとした。残像を残し、羽ばたきと共に鋭く伸ばした口吻が霊夢の喉元を挟らんと奔る。先程、ここを狙った必殺の一撃だ。

しかし、霊夢は容易くその尖端をお祓い棒で受け流し、触角の第二撃もあっさりとかわし、代わりに強烈な蹴りを蛾の腹へと叩き込んでいた。衝撃と共に靴裏から霊撃が炸裂し、妖蛾は勢いを失って地面に叩き付けられる。

「――！！」

衝撃と共に土煙が舞う。妖蛾の苦悶の声か、ガラスを掻き毟るような不快な音があたりに響いた。躊躇なく追撃の霊符と退魔針が、地面に常世神を縫い止める。

圧倒的な力を前に、妖蛾はなおも身を震わせ、翅を引き千切ってでも鱗粉を含む風の嵐を叩きつけようとするが――

『ねえ、返事して！ 聞こえるわよね!？』

そこに割り込んだのは、リグルの言葉にならない通信だった。

虫の王の喚起によって呼び出された螢火達が、明滅する光の中に混ざって呼びかける。常世神はそれを見て、ゆっくりと片方の触角を持ち上げた。

『……なた、は』

ノイズ混じりの酷い訛り。まるで通じなかった互いの言葉。それでも、異界の虫と会話するため、リグルは努力を続けていた。少しずつ変化を繰り返したリグルの触角が、ついに異邦のチャンネルを探り当てたのだ。

『あなたは、誰?』

『リグル・ナイトバグ。螢の妖怪……この郷の、虫の王よ』

『どうして私の邪魔をするの。今からこいつを、やっつけてやるのに』

たどたどしい言葉を操りながら身を起こそうとする妖蛾に、リグルは強い制止の命令を送った。一族の長たる王の命令は、同じ虫妖怪同士でも有効に働き、常世神の動きを縛る。びくりと静止した妖蛾の眼前を、霊力を満たした符がかすめてゆく。

『……話を聞いて！ このままじゃあなたも殺されちゃうわよ!』

必死に続く説得の一方で、紅白の二色が空を裂く。

わずかでも、リグルに時間を作ろうと。傷を負ってなお攻撃を試みる針妙丸とここに對し、靈夢は陰陽玉を掲げたまま迎撃に靈札を繰り出していた。

遠隔から投げ込まれる靈札が、巧みな軌道であたりに着弾し退魔の力を放つなか、リグルは常世神の近くに駆け寄り、その体を支えながら呼び掛ける。

『もうわかったでしょ！ あいつはどんな妖怪でも、容赦なく簡単に退治しちゃう恐ろしい巫女なのよ！ あなたじゃ逆立ちしたって勝ち目はないわ！』

『巫女？ そんなもの、怖くなんかないわ。私は常世の神なんだもの。人間なんかに負けたりしない』

『神様だろうと悪魔だろうと関係なく吹っ飛ばされるわよ！ もう何度も見てきた！ あなたがどんなに強かったって、勝てないわ！ 見なさい、ほんのちよっと戦っただけでその様じゃない！』

リグルを無視して羽ばたこうとした常世神だが、バランスを崩してそのまま地面に突っ伏した。いくつも穴の開いた翅は、右半身に張り付いた靈札によって根元から力を失い垂れ下がっている。反対側の触角もお祓い棒で傷つけられ、彼女はもはや、平衡感覚もままならないようだ。

「……どうして?」

不意に。信号ではなく生の声で語り掛けられ、リグルは驚いて眼を瞬かせた。

傷だらけの常世神は、小さな唇を動かし、たどたどしい言葉でその様子を窺ってくる。

その、不安に揺れる小さな瞳に。困惑と疑念の渦巻く心に。リグルはしっかりと頷いて、まっすぐに応えた。

「あなたを助けたいからよ！」

虐げられ、食べられ、それでも毎日を生きる虫たちの王として。

「あなただって虫の妖怪。なら、私はあなたを守らなくちゃいけないわ」

「……わたし、を？」

「そうよ！」

「……ふうん」

不意に割り込む声に、ぞくりとしたものを覚え、リグルは反射的に頭上を振り仰いだ。

見れば、面霊気と小人の姫を片手間に叩きのめし、なお宝玉を掲げたままの博麗の巫女が、静かにリグル達を見下ろしている。巫女の手にした陰陽玉には凄まじい霊力が注ぎ込まれ、邪悪な妖怪を滅ぼさんと輝きを増していた。

——宝具「陰陽鬼神玉」。博麗神社の至宝が、芯の姿を現して、高々と天に掲げられる。

「……つまり、見過ごせて言うわけ？」

「そうよ！」

圧倒的なプレッシャー。幻想郷の調停者たる巫女の前に、リグルは怯えを喉の奥に飲み込んで、まっすぐに立ち塞がる。膝はすっかり震えているが、そんなもの知った事ではない。「やるって言うなら私が相手になるわよ！ やりたくないけど！ やらなきゃいけないみたいだし！ ……本当にやらないといけないのかなあ！ やるっていう心構えだけで見逃して欲しいんだけど！」

博麗の巫女を前に、だんだん尻萎みになる心を奮い立たせ、ルシオラ・クルキアタ皇祖螢の王は叫んだ。

「でも！ この子は今もう、幻想郷のやり方をちゃんとわかってるわ。言葉だつて通じる！ むやみに人を脅かすような妖怪じゃない！」

「もう少しましな言い訳をしたら？ 第一、そいつは——」

「いいえ。違うわ！ だって、私達がしてたのは弾幕ごっこよ！ 言葉が分からなかったから、あなたには通じなかったみたいだね！」

深い打算や理屈があったわけではない。けれど、きつとそうするのが一番だと、少女は信じた。自分の心に、魂に。

螢妖怪リグル・ナイトバグの、自分なりの虫の王たる矜持に。

「それとも、命名決闘を定めた巫女が、それを破るのかしら！」

ぎゅうっと常世神の手を握り、半ば自棄になって、リグルは声を張り上げる。

巫女がわずかに表情を変えるのを見逃さず、即座にとっておきのスペルを宣言。

「あなたも合わせて！ 早く！」

言葉にして伝えている暇はない。昆虫のフェロモンと視覚に乗せて、リグルは常世神に訴えた。彼女の意識と同調するように、力が膨れ上がる。

それは、生と死と、四季を巡る、季節外れの大嵐。
何千何万という蝶の羽根が、運命と確率とを吹き飛ばして、顕現する。

——LastWord「季節外れのバタフライストーム」

幻想郷と、常世の国と。二人の虫妖怪の力が重なり、混じり合い、輝く蝶の羽ばたきとなって辺り一帯に満ちる。

渦を巻き突き立つ羽ばたきの洪水は、紅白の巫女を飲み込んだ。



……さて。

という具合に一度はカッコ良く決めてみたリグルであったが、博麗の巫女はラストワードの直撃を受けた直後に平然とした顔をして現れ（どうやら全部避けたらしい。化け物だ）、そ

のまま反撃の陰陽玉で二匹はまとめて退治されるという、実に締まらないオチが待っていた。……とは言え、巫女が反撃にスベルを用いたことで、この騒動は名目上、命名決闘であったということになり、里での騒動は思わぬ程に上手く落ち着く事になった。

常世神の騒動はいろいろと有耶無耶になったまま、博麗の巫女の尽力で解決したということとで治められたのである。

後で聞いた話によると、常世神の信徒となっていた里人の中には、貸本屋の看板娘もあり、阿求がそれとなく手を回していたということがあるが——詳しいことはリグルも聞いていない。あまり深入りすると身を滅ぼすだけだからだ。

職工頭は憑き物が落ちたように正気を取り戻し、少しずつだが里の絹織物も元の生産を取り戻しつつあると言う。

そして。

騒動を経て言葉を得た常世神に、リグルは虫の王たる権能をもって、新しい名前を付けることにした。

常世の虫——エタニティラルバ永遠の幼虫。

虫の変態、羽化。生まれ変わりと成長、変化を象徴とする妖精の名前である。

繭を作り人の糧となるという力の部分は、いろいろ問題になるので切り離さざるを得なかったが——まあ、きっとそれは、他の誰かが引き継いでくれているのだろう。そうやって名

前を持ち、スペルを使うことができるのなら、彼女は立派に幻想郷の一員である。

常世の神という物騒な側面は脱ぎ捨て、無害な妖精になったのであれば、敢えてそこに誅罰を叫ぶ者もいなかった。実際、妖精は適当にしばき倒したところでただの「一回休み」でしかない。

「わーい！ たーのしー！」

橘の木を食べ、緑の身体に黒い斑模様。黒に白黄の線斑の翅。常世神のもうひとつの側面、アゲハ蝶の姿を得て、彼女は今日も元気に空を飛ぶ。最近、向日葵畑の妖怪から送られたお気に入りの冠をつけて、ますます絶好調である。

そんな彼女の元を、虫達を引き連れて訪れ、蛍の王は微笑むのだ。

「——ようこそ、幻想郷へ！」

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅折葉と申します。この度はお手にとっていただきありがとうございます。

リグル・ナイオトバグオンリーイベント「東方蛍光祭」、開催おめでとうございます。

この本、「さばえなす」は、蛍妖怪にして蟲の王リグルが、小人の姫や面霊氣と共に、里に現れた新興宗教——常世神を巡る騒動に挑む、本サークル61冊目のSS本となります。

リグルを主軸にして書くお話としてはこれで4本目であり、数多のリグル押しサークルさんの中ではまだまだ新参の域を出ませんが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

さて、今回も恒例の謝辞を。

本作の表紙・題字は、サークル「にいなにゃんにゃん」のいな様をお願いいたしました。里を襲う危難とそれに立ち向かうリグル達の姿を、猛烈にカッコよく描いて頂けましたこと、急なスケジュールの中で対応していただいたこと、心より感謝いたします。ありがとうございます。

また、イベントへの参加のお誘いをいただいた東方蛍光祭主催の長閑様にも様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【参考文献】

- ・「古代の虫まつり 謎の常世神」 著：小西正己（学生社）
- ・「人物叢書 秦河勝」 著：井上満郎（吉川弘文館）
- ・「ルシオラ・クルキアタの生涯」
著：水之江めがね（ぼたぼた焼き）
- ・「二面持つ明星の巫女 ～リグル・ナイトバグ最強改造計画」
とび爆ぜっ／ぐい井戸・御簾田（第9回川崎読書会）
- ・「ピクシブ百科事典」（<http://dic.pixiv.net/>）
- ・「ニコニコ大百科」（<http://dic.nicovideo.jp/>）
- ・「ウィキペディア フリー百科事典」
（<https://ja.wikipedia.org/wiki/>）
- ・「日本神話・神社まとめ」（<http://nihonsinwa.com/>）

【奥付】**「さばえなす」**

初版 平成29年6月4日

東方蛍光祭

オルハザカサンパンチ
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは
著者: 銅 折葉 (@domioriha)

表紙・題字: にいな様 (@ninanyan)

(<http://ninanyan.blog.fc2.com/>)

(<https://www.pixiv.net/member.php?id=820952>)

印刷所: (株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」
の二次創作です。



折葉坂三番地

著:銅折葉(折葉坂三番地)

<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog>

表紙・題字:にいな(にいなにゃんにゃん)

<https://www.pixiv.net/member.php?id=820952>